

ライティング・センターのチューターの成長に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中竹, 真依子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/522

ライティング・センターのチューターの成長に関する一考察

中竹 真依子

1. はじめに

近年、日本の大学における学生のアカデミック・ライティング支援の新しい形態として、ライティング・センターの存在への関心が高まっている。ライティング・センターは、授業外で学生のライティング支援を行う施設である。ライティング・センターの理念は、“producing better writers, not better writing（書かれたものをよくするのではなく、書き手を育てる）”（North, 1984, p. 438）である。したがって、ライティング・センターでは、学生が書いたものを添削するのではなく、対話を通して学生自身にどのように文章を改善できるかを考えさせる。ライティング・センターは、1930年代にアメリカで誕生し（Carter-Tod, 1995）、もともとは第一言語（L1）教育としてのライティング力育成のための施設であった。その後、1950年代から1970年代にかけて増加し、1990年代以降、英語を母語としない学生（移民や留学生）の増加により、「第二言語（L2）教育としてのライティング力育成」という役割も新たに加わった。現在は、アメリカのほとんどの大学に設置されており、日本をはじめとするアジアの国々においても、ライティング・センターを導入する大学が増加している（例えば、太田・志村, 2012）。日本においては、2004年に最初の大学ライティング・センターが設置された。以後、年々その数を増やし、2016年1月の時点で、日本のライティング・センターの数は20以上にまで増加した（Itatsu, 2016）。今後も日本の大学において、ライティング・センターを導入する大学は増加すると予想される。

本稿では、新人チューターのチュートリアルの実践に対する意識の変化を縦断的に調査し、チューター自身の省察によって明らかにした研究結果の一部を報告する。

2. 先行研究

日本のライティング・センターに関する研究においては、これまで、セッションにおける対話の効果を分析した佐渡島・志村・太田（2009）や佐渡島（2009）、ライティング・センターのチュートリアルがチュートリアル後の書き直しに与える影響を調査した研究（Nakatake, 2012; Nakatake, 2014a; Nakatake, 2014b）、チュートリアルにおいてチューターが用いるチュートリアルの技法に着目したNakatake（2015）などがある。

チューターの意識に着目した先行研究には、成田・松林・ヘイズ・前田・金澤・花岡（2012）、太田・佐渡島（2012）、太田・ドイル・坂本・佐渡島（2013）、佐渡島・太田（2014）がある。成田ら（2012）は、東京国際大学の「ライティングラウンジ」で勤務する学部生チューターに対して行った事前訓練の内容およびチューターとしての活動から得たチューターの学びについて報告している。チューターへのアンケート結果より、チューター

は、対話を通じて学生の考えを整理し明確化させるというチューターの役割や学生が抱える問題の認識・理解、また、学生や相談内容に応じた対応の必要性を学んでいたことが明らかとなった。太田・佐渡島（2012）は、PAC 分析を用いて、大学院生のチューター 2 名がセッション中に意識を向けている要素を分析し、チューターは「書き手のやりとり」「文章」「セッション全体」という 3 つの要素に注意を向けていたことを報告している。太田・ドイル・坂本・佐渡島（2013）は、ライティング・センターでのチュートリアルにおいて新人チューターが直面する課題を、実地研修におけるワークシートの分析により検討している。「文章を診断し、セッションの目標を立て、時間内に達成するという、チューターの役割を反映した課題」については認識し、書き手主体の対話や気づきを促す質問等、ライティング・センター特有の指導を強く意識していたが、「書き手」への意識は少ないことが明らかとなった。また、新人の意識は、新人研修の内容と関係していたことも報告している。佐渡島・太田（2014）では、チューターの成長について、早稲田大学のライティング・センターでの事例を調査し、チューターは、「書き手に沿う」「優先順位をつけて指導する」「傾聴する」「的確な診断」といったライティング・センターでのライティング指導ならではの、チュートリアルの姿勢や技能を身につけたことを成長として捉えていたと報告している（p.67）。また、チューターは、「書き手に応じた指導」ができるようになったことも、成長として捉えていたことがわかった。さらに、文章指導力の向上だけでなく、指導力全般に通じる意識の芽生えや他者との関係の認識の変容も見られ、チューターは、「人間としての成長」も実感していることを報告している。

しかし、チューターが、自身のチューターとしての成長をどのように捉えているかを縦断的に調査した研究はこれまでにない。そこで、本研究では、チューター自身に過去 2 年間の自身のチュートリアルの振り返りをしてもらい、チューターとしてどのように成長したかを、チューター自身の省察によって明らかにすることを試みる。

3. 研究方法

3.1. 研究対象者

本研究では、新人チューターの成長を捉えるため、複数の新人チューターを研究対象者としてデータ収集を行ったが、本稿では、紙面の関係上、2 人のチューターの事例に焦点を絞ることにした。本研究の研究対象者は、いずれも 2012 年 4 月に東京都内にある A 大学大学院修士課程に入学し、同年 4 月より A 大学のライティング・センターのチューターとして勤務し始めた。いずれも大学等教育機関での指導経験はない。表 1 は、本研究の研究対象者の情報をまとめたものである。

このライティング・センターでは、アカデミック・ライティング教授法のトレーニングを受けた大学院生チューターが、理系および文系の全 1 年生を対象とした必修の英語ライティング科目の受講者に対し、一対一を基本とした日本語でのチュートリアル（1 セッション 40 分）を行っている¹⁾。学生の希望によって、英語でチュートリアルを行う場合もある。チュートリアルでは、英語の論文の書き方、構想や論述方法の相談、その他にもプレゼン

テーションのアドバイスなどを行っている。

チューターの募集は、年に2度各学期前に（春休みと夏休み）行われており、採用の際には、本人が書いた英語のレポートや論文の提出、書類・面接審査が行われる。審査に合格すると、応募者はチューターとして採用される。採用後は、ライティング・センターの理念、チューターとしての心構え、ライティング・センターにおけるチュートリアルの実践についてのオリエンテーションの受講、ライティング・センターの宣伝活動も兼ねた上述のライティング授業の見学、先輩チューターのセッションの見学、各学期1～2回ワークショップなどの定期的な研修を受ける²⁾。

表1 本研究の研究対象者情報

	チューター A 直樹（仮名）	チューター B ³⁾ 明子（仮名）
性別	男性	女性
言語	日本語母語話者	日本語母語話者
学年	大学院生（修士課程）	大学院生（修士課程）
専門	辞書学	バイリンガリズム 早期英語教育
採用年	2012年4月採用	2012年4月採用
チューターになろうと思ったきっかけ	・新しいことに挑戦したい ・面白そう ・学部生との交流のきっかけ ・所属ゼミの先生の紹介⁴⁾	・教育者としての経験を積むため ・自分の英語力向上のため ・所属ゼミの先生の紹介⁴⁾

3.2. データ収集

本研究では、2012年度前期から2013年度後期までの4学期にわたり、各学期ごとに複数のセッションを録音・録画し、毎回のセッション後には、振り返りシートを記入してもらい、そのシートに基づくフォローアップ・インタビューを行った。そして、2013年度の後期終了時（2014年1月）に、録画したセッション、セッション後の振り返りシートをもとに、2年間のチュートリアルを振り返ってもらい、自身のチューターとしてのように成長について、刺激再生法を用いた半構造化インタビューを行った。研究協力者には、事前に研究倫理に配慮することを説明し、チュートリアルを録音・録画することならびにインタビューの内容を録音する旨の承諾を得た。本稿では、これらのデータのうち、2013年度後期終了時に行ったインタビュー調査の結果を報告する。

4. 結果

本節では、2人のチューターの省察による自身のチュートリアルの実践の変化とチューターとしての成長を、彼らの語りを交えながら紹介していく。チューターの語りに付した下線は、筆者による強調である。

4.1. 直 樹

4.1.1. 理念の実践から「コミュニケーション重視」の意識へ

まず、直樹が語った自身のチューターとしての成長は、ライティング・センターの指導理念の実践から、学生との「コミュニケーション」を重視するという意識の変容である。

前は自分が与えられた役割をちゃんとやることを気にしている気がするんです。ニーズを満たすとか、ちゃんとライティング・センターのコンセプトに合うことをできるかどうかとか。多分このへんだと若干慣れてきたのか、役割を果たすというよりも、コミュニケーションをどうやってスムーズにやるかということに気になっているような気はするので、多分やるのがなんとなく分かってきた時期なのかなって感じがですね。

チュートリアルを始めたばかりの頃は、添削をするのではなく、対話を通して書き手自身が文章の問題点や修正方法に気づくよう支援する、というライティング・センターの「理念を実行に移す」ことを強く意識していたが、チュートリアルの実践経験を積むにつれ、理念が無意識のレベルで実践できるようになったため、いかに学生とのコミュニケーションを円滑に進めるか、ということに意識が向くようになったと語ってくれた。

(2012年)5月は自分の役割にプラス、サプのレベルでコミュニケーションみたいなものを気にしていたと思うんです。で、(2012年7月の段階では)メインのその(与えられた)役割(を果たす)の部分がある程度解消できてきたので、コミュニケーションの部分^が次のプライオリティの部分に上がってきたのかなって感じがですね。

上記のインタビューコメントは、直樹がチューターを始めた2012年5月に録画されたチュートリアルと、同年7月に録画されたチュートリアルを比較した際に語ってくれたものである。このコメントより、直樹は、比較的早い段階で、理念を実行に移すことに向いていた意識が、書き手と自然な形でコミュニケーションをとりながらチュートリアルを進めるという意識に変容していったことがわかる。

また、下記のインタビューコメントからは、ライティング・センターでは、書き手に文章の問題点やその修正案を考えさせるために、質問を投げかけることが重要となってくるが、それを意識せずとも、自然な会話の流れの中で質問し、学生に考えさせる技能が身についてきている様子がうかがえる。この点に関しても、ライティング・センターの理念の実践がある程度身についてきて、コミュニケーション重視に意識が変容した結果であると推測できる。

たくさん質問するようになったと思います。意識をせずに、勝手に質問する体質に変わったというか。質問しようとは思ってないんですけど、流れの中で、聞くのが普通だよ、みたいな感じになってるんですよね。きっと。だからあまり深く考えてはやってるわけではないんですけど。」

さらに、コミュニケーションに意識が向くようになった結果、以下のコメントにあるような発話スタイルのバリエーションも増え、チュートリアル全体のテクニックの向上にもつながっていると推測できる。

今はこうしたらいいんじゃないかなーとか、多分こっちの方がいいんじゃないかなとか、そういうなんかモダリティが増えたような気がします。

「ライティング・センターの理念を実践しなければ」という意識から、コミュニケーション重視への意識の変容に伴い、チュートリアルのテクニック自体の変化を実感していることも、成長と捉えていた。

4.1.2. 「自分らしさ」が出せるように

直樹が自身のチューターとしての成長を語る上で、多く言及していたのが、「表情の硬さ」、「完璧さの追求」、そして「自分らしさ」であった。新人チューターの頃は、ライティング・センターというこれまでに経験したことのない教育現場での実践と、自分の専門分野と異なる理系の分野の文章を検討するといったさまざまな要因が絡み合い、完璧を目指して固くなっていた、ということをインタビュー中度々言及していた。

(ビデオを見ながら)「この時、机の上に辞書を置いているんですよ。で、多分ちゃんとしなきゃっていう硬い意識とか、きっとそういう変な構えとか意気込みとかあったのかなっていう気がしますね。理系を教えるっていうのが自分にとって特殊だったので、もし分からないことができたらすぐに調べられるようにとか、きっとそういうことを考えていたのかなって思うんですけど。今は別に分からない単語が出てきても、ふーんって言って、「これどういう意味？」って(学生に)聞いて、あ、そう、へーで終わりですね。だからちょっとこう完璧主義だったのかもかもしれません。」

まだ(このビデオの)最初の方若干表情が硬いのは、まだこう内容を完璧に理解しなきゃって思っている部分があって、いざ自分が内容理解できたってなると、余裕が出てるなってあからさまにわかる気がしますね。

(2013年7月の時点では)それでもやっぱりこう何やかんや言いながら、最初から最後まで全部文を読んでみようとしている。まだ完璧にしなきゃと思っているところが残っているかもしれない。

このライティング・センターでは、チューターは上述の理系のライティング授業の受講生の論文支援が主なため、ほとんどのチューターにとって、聞きなれない専門用語や図表・数式など、理系の分野の内容に精通していないことが大きな不安要素であるのだ。しかし、素直に「ここがわからない」と学生に伝えることで、チューターの疑問も解消され、学生自身

が自分の文章の問題点に気づく姿を見て、直樹の意識に変化が起こったという。「完璧を目指さなくてよい」という心構えに変わり、そしてわからなければ学生に質問し、「一読者としての視点を提供すればいいのだ」という意識に変化していった。新人チューターの頃は、「完璧な理解」や「完璧なチューター像」を目指していたが、わからなければ聞く、という姿勢を受け入れられるようになったことも、チューターとしての成長と捉えることができるであろう。

また、直樹がチューターとしての成長を認識する上で重要な要素である「自分らしさ」に関しては、ユーモアや関西方言の使用の変化に表れている。

最初は若干緊張してたとかあったと思うんですけど、もともとユーモアっぽい性格の人間なので、それがそもそも出せてなかったのかなと。で、余裕がでてきたから、ちょっと自分のキャラを、普段通りのキャラでやりたいって思うようになった。

今よりも方言がほとんど出てこない。関西弁が出てこない。今だったらもちろん敬語でしゃべるんですけど、わりとそのリラックスした感じで関西弁が出てくるのが今は多い気がするんです。この（2013年7月）段階では、聞いたんですけど、ほとんど、もちろん関西のイントネーションは残っていますが、言葉の形の上で関西弁が表れてなかった気がするので、まだ少しかたいというか、ある意味指導する側らしくしなきゃと思っているのかもしれないです。

今よりもあいづちのバリエーションが少ないですね。今は多分「あーそうなんやー」とか「あーそうなん？」とかあいづちのところで結構関西方言が出たりするんですけど、この時期（2013年7月）ってまだ「はい」とか「うん」が多いような気がします。なのでまだ硬いのかな。

相槌は、書き手をチューターに内容を理解してもらい、受け止められているという気持ちにさせ、悩みを積極的に話す気持ちにさせる、重要な役割を果たすものである。相槌によって書き手の意図を十分に引き出す。また、上記のコメントから、完璧さの追求や表情の硬さが和らいでくるのには、ある程度の時間を要することがうかがえる。どんなにチュートリアルの経験を積んでも、毎回違う書き手や文章課題に対応しなければならないので、直樹のように、不安が解消されるのに時間がかかるのは想像に難くない。

また、表情の変化について、下記のような興味深い言及もあった。

内容に対する理解度とか、自分のその一わからなくてもいいやっていうあきらめ具合が割と表情のかたさと比例している気がします。今だったら、頭のなかでは真剣に考えて理解しようとしても、それを表情に出さないでやれることは出来ている気がします。笑ってこう「そうなん？」とか言いながら頭の中はフル回転みたいなことは少しはできるようになったのかなと。

ライティング・センターにおけるチュートリアルは、対面で行われるため、チューターの気分や表情は学生に伝わりやすい。学生が持参した文章に検討すべき問題が多く見受けられたり、文章の問題点が深刻であったり、文章の内容の理解に時間がかかってしまう場合などは、つい表情が硬く厳しくなってしまうがちである。どんな局面においても、チューターの落ち着いた表情や態度は、学生に安心感を与え、チューターへの信頼にもつながる。たとえ難しい問題に直面しても、なるべく書き手にチューター自身の不安や戸惑いが伝わらないよう、安心して話せる雰囲気を作ることができるようになったことも、成長として捉えていた。

4.1.3. 「教える」から「学生と一緒に考える」姿勢へ

ライティング・センターは、「書き手を育てる」場所であるため、学生が持参した文章を直したり、チューターが文章の問題点に対する修正の仕方を教えるということはせず、あくまで学生自身が問題点や修正方法に気づくよう支援にあたる必要がある。インタビューの中で、直樹は、チューターとして採用された後のオリエンテーションやワークショップ等を通じてその点は理解していたものの、新人の頃は、やはりライティング・センターの理念の実践という感覚で学生に質問を投げかけたりしていたため、学生と協働して文章を検討するというよりも、意識せずとも「教える」という認識の方が強かったかもしれない、と語っていた。

最初の方は、学生が論文を持ってきた時に、「(論文を) 見てみましょう」という表現を使っていることが多い気がするんですけど、今は「(論文を) 見ていきましょう」という言葉を使っている気がするんですよね。もしかしたら、そこに意識が変わっているのかもしれない。(学生と) 一緒に(論文を) 見るという意識が今の方があるのかもしれないですね。

(以前は) 今より学生が持ってきた紙を自分の方向に向けている感じがする。今は割とその、このビデオの時(2013年7月)よりも学生から少し離れた距離に座ってる気がするんですよね。少し離れて横からこう学生が持ってきた紙をみるようにしている気がするんですよね。だからあくまでも「読む」のは学生の方っていう感じで、今はやってみる気がするんですよね。そういう意味では、なんか今よりも自分が自分の持っているペンで相手の紙に書き込んでいるシーンがすごく多くて、でも今僕はほとんど書かないんですよ。自分でメモしてくださいって。

しかし、上記のコメントより、チューターとして2年目を迎えた2013年度前期頃から、言葉の上でも態度の上でも、直樹の中に、「学生と一緒に文章を検討する」という意識が根付いている様子がうかがえる。

また、「教える」という意識は、直樹が学部時代に塾講師のアルバイトをしていたことも少なからず影響しているようである。

ずっと塾とかで教えていたので、やっぱり最初の方は、その塾とかで勉強を教える真面

目なスタイルが出てしまっているのかもしれない。使い分けができずに、塾でみられてた「先生」としての自分っていうキャラクターが残ってるような気がします。…（中略）…最初は分かっているふりをしなくてはいけないみたいなのがあったと思うんですけど。…（中略）…（今は）半分くらい友達みたいな。ちょうどサークルとか部活の後輩がなんか聞いてきた時に、「これはこうじゃない？」って教えるようなそういうスタイルに近いかなって思います。

このように、チューターになりたての頃は、塾講師の時の指導スタイルがなかなか抜けきれていないことを指摘しているが、チュートリアルの実践経験を重ねていくうちに、学生に「教える」のではなく、学生と「一緒に考える」という意識が彼自身の中で徹底されたことで、直樹の言葉でいう「半分友達」や「部活やサークルの先輩」という認識に変化したものと考えられる。このようなチューターの立ち位置に関する意識の変化も、成長として捉えられていた。

4.1.4. 指導観の変化

指導観の変容も、自身の成長を語る上で重要な要素であるようだ。直樹の場合は、下記のインタニューコメントにみられるような、1セッションの時間の使い方に対する意識の変容を成長と捉えていた。

多分この段階で無理に与えられた40分の時間を全部使おうとは思っていないのかなっていう。終われば終わればいいんじゃないっていう、今はそうなんですけど。無理に全部時間を使わなくていいっていうふうに考えるので、時間の構成とか配分を考えることも徐々になくなってきたのかもしれないです。時間足りなかったらまた（ライティング・センターに）来ればいいんじゃないみたいな感じなので、今は。だからそういう意味でも時間配分は考えなくなった。

以前の直樹は、1回のチュートリアルで学生のニーズを可能な限り満たしてあげたいと考えていた。それが、チューターとして経験を重ねるに連れ、「1回のチュートリアルで文章を出来る限りよくする」という視点よりも、問題をたくさん解決しようとして、書き手を混乱させないように、「このチュートリアルでできることをしよう」という意識に変わったと語っていた。自分1人で全ての問題を解決しようとするのではなく、1セッションの中で、一チューターとしてできることは何かを考えるようになった時、自身のチューターとしての成長を感じたと語ってくれた。

4.2. 明子

4.2.1. 時間の使い方に対する意識の変化

さっきの（ビデオで見たチュートリアル）を思い出すと、時間をあまり気にするのを慣

れていなかったですね。時間が押しているのを気にするのが少ない。今はかなりそれを反省していて、気にするのが染み付いてきたような気がします。昔は一つのことに対して知っていることをできるだけ言い過ぎちゃって、それに時間がかかってしまっている傾向にあるかなと思います。

興味深いことに、チュートリアル の時間配分に関して、直樹は時間（配分）を気にしなくなったと述べていたのに対し、明子は時間を気にするようになったと述べている。2 人とも、「40 分間という時間の中で出来る限りのことをする」という意識は根底にあるが、チューター B は、学生が抱える問題をなるべく多く解決するために、1 つ 1 つの問題をバランスよく検討することを意識するようになったと語ってくれた。直樹と明子の意識の違いには、指導観や性格の違いなどが反映されていると推測できる。

また、明子は、時間の使い方に関する具体的な変化についても言及している。

基本的にやっていることはあまり変わっていないんだなあというか、例えば、先生はなんて言っていましたか？と聞くのは変わってなくて。…（中略）…生徒がそれをちゃんと（授業中に）聞き取れているかとか、それでレベルとかその人の学習状況とか把握するのは昔からやっていたみたいで、意外に変わっていないこともあって、レファレンスに関しても、冊子はもらいましたか？って聞いて、でも、その後違ったのは、読めばわかることはあまり教えてあげないというか、昔一緒に調べたりして時間をかけてたんですけど、それは時間もったいないなってあとで（思うようになって）。自分でみればわかるものは。コロケーションとかは難しいので、一緒に見る価値はあると思うんですけど、レファレンスは冊子渡せばわかることなんで、それは時間（の使い方）に関しては変わったところなんだと思いました。

引用の仕方やレファレンスの書き方などは、ある程度の決まりがあるので、資料を配布すれば書き手が自力で対処できうる。教えすぎずに、学生が一人でできることは学生にさせ。セッションで取り組む優先順位を考え、時間を有効に活用しセッションをまとめらえるようになった。

4.2.2. 不安からの解放、そして自然なコミュニケーションへ

昔はあんまりしゃべらないで、うんうんって聞いてたんだなって（笑）。なんかあとのビデオみたら、いちいちフィードバックしながらしゃべってて、楽しそうでしたね（笑）
我ながらなんか楽しそうに（笑）余裕がやっぱりできたのかなと。心の余裕っていうか、前はよし、頑張ろう！みたいに（気構えて）、ちゃんと答えられるかなという不安と一緒にきつとやってたんじゃなかなと。」

このような、チュートリアルに対する気負いや不安は、直樹の語りにも見られたことであ

る。明子は、チューターを始めた頃、チュートリアルにおける文章診断に対し不安を抱えており、文章を完璧に診断しなければならないと考えていた。しかし、セッションを重ねるうちに、セッションは、あくまで書き手とチューターとで作り上げていくものであるということに気づいたという。書き手がチューターとの対話を通して自分で文章の問題点に気づく姿を見たことで、チューター自身の意識に変化が起こり、力むこともなくなり、不安からも解放されたと語ってくれた。

さらに、以前はライティング・センター特有の指導法の実践を意識していたが、セッションを重ねるうちに自然に話せるようになり、学生との自然なコミュニケーションへと変わっていったと語っている。

昔より自然にしゃべるようになった。逆に今はあまり何も考えずに、相談に乗っているような感覚で。昔は色々なことを気にしながら聞いているような印象が、ビデオ見ても（ありますね）。例えば、じゃあこれは〇〇しようとか、これはあまりしゃべらないようにしようとか、できるだけ相手に考えさせるようなクエスチョンをしようとか、すごく意識しながらしゃべっているような印象があって、今は、必要なことをどんどんどん一緒にしゃべっているような、無意識に何かやってるのかもしれないですけど、自然に話しているような気が（しています）」

表現は異なるものの、ライティング・センターにおけるチュートリアルが、学生への「指導」ではなく、学生との「コミュニケーション」という認識に変容したことが伺える。

4.2.3. 学生に応じた指導ができるように

明子が、自身のチューターとしての成長を振り返る上で、特に強調していた点が、学生に応じた指導ができるようになったことであった。ライティング・センターには、さまざまなタイプの学生が支援を求めて訪れる。持参する文章はもちろんのこと、学生の性格や置かれている状況、精神状態もさまざまである。

相手の性格とか、例えばさっきの（ビデオ）の最後の男の子は、いちいち自分のことを責めるというか、私が言ったことに対していちいち自分を責める子だったので、そういう子にはできるだけ、なんだろう、気にしないような言い方をしとあげるとか。例えば、他の子だったら、逆に全然何も気にしないで自分の言いたいことをうわーとか言う子とかいて、余計なこととかも入っていて、そういう時には逆に整理できるようにできるだけ私が結論を言ってあげるとか。相手の性格とか、その時（の状況）によって変えているのはあるかもしれません。」

初期の頃は自分も大学院に入ったばかりで、A 大生に教えるというのも新鮮だったので、言われたことをやって、相手にできるだけいい学びを得てもらえるようになっていうような、すごく真面目なというかピュアというか、フレッシュマンという感じだったん

ですけど、今はライティング・センター以外でも A 大生と触れ合う機会がたくさんあって、他の TA とかもやっているの、いろんな性格の子がいるっていうのがだんだん分かってきて、その子自体をよく考えるというか、(原稿の) 中身だけではなくて、それを無意識にやっているかもしれないですね。」

先に判断するのは前はあったのかもしれないですけど、今は逆にバイアスをできるだけなくそうっていうふうに思うようになって、そのチューターを経験するようになって、セッション 40 分の中で、この子はどういう発言をするのかなっていうのをみて、合わせるようにするっていうか。例えば、明らかにこの子やる気なさそうだなっていう感じの子でも、意外とやる気あったりするとか、そういうのを経験して、あまり決めつけて話してはいけないなって。ちょうど先日チュートリアルをやった子も、あまりしゃべってくれないとか、自分から積極的に説明できない子で、やる気がないのになって少し思えるんですけど、よく聞いてみると、自信がなかったりとか、性格上ちょっとシャイだったりだとか、っていう点で必ずしもやる気がないわけではなかったの、だからうまく問いかけを投げると、すごく笑ってくれたりとかしてたので。

(学生が置かれている) シチュエーションが推測できるっていうか。… (中略) … (フィードバックの) 量とかも、この子の疲れ度で、あとこの時間だったらこれくらいだったらできるかなとか、そのアドバイスが的確に近づくというか。… (中略) … ** 先生は専門家だから、結構いっぱい言いたくなっちゃう時があるみたいで、でもその生徒さん、結構何かもうあーどうしようみたいな感じになっている時があるので、まーそれでその先生にアドバイスもらってありがとうございましたって言って、また 2 人で話している時に、「まー、今回ちょっとそこまでできないかもしれないから、ここに注目してやろうか」って言うと、あーよかったみたいになる子もいるんで。学生の状況をみて妥協点を考えてとにかくペーパーを書き上げるところまで持っていく。… (中略) … まあそういうのが分かってあげられるのは、やっぱり年も近いというか、私もまだ学生の身なんで、そのへんはちょっと先生よりかはチューターは、大学院生っていう意味はあるのかなと。

上記の語りにおいて、明子は、教員ではなく大学院生がチューターである意義についても言及していた。また、この点に関連して、明子は、学生の自信のつけ方や褒め方のバリエーションも増え、学生の文章のよい点をより具体的に指摘できるようになったと述べていた。書き手は、良い点を指摘されると安心し、安心すると自分の考えや意図を話しやすくなり、安心することで、自分の文章を落ち着いて見ることもできる。また、具体的に学生の文章の良い点を指摘してあげることは、学生が自分の文章の強みを理解することにつながり、書くということに対する自信や前向きな気持ちを育て、よりよくしようというやる気にもつながる。チュートリアルにおけるチューターの対応は、書き手の気持ちを左右する重要な要素である。学生にはさまざまな性格の学生がいるということを理解し、学生のやる気をそがない

よう、チュートリアル中に学生をよく観察し、学生の反応を見ながらチュートリアルを進めていくことができるようになったことを、彼女自身のチューターとしての大きな成長と捉えていた。

4.2.4. 独自のスタイルの確立へ

A 大学のライティング・センターでは、チューターが事前に学生の文章を読むことはできないため、セッションの初めに、学生に実験の内容や結果など文章の概要について簡単に説明してもらうことが一般的である。特に、チューターは自分の専門と異なる分野の文章を読むことがほとんどなので、文章を検討する前に、学生の論文の内容をある程度頭に入れてセッションに臨むことで、後の文章検討をよりスムーズに進めることにつながるからである。

明子も、以前はこの手法をとっていたが、セッションを重ねるうちに、文章検討の前に学生に説明してもらうのではなく、先にチューターが学生の文章に目を通してから文章検討に入るというスタイルに移行している。

前は、ライティング・センターのミーティングとかで、まずは学生に短い説明させましょう、短い説明をさせて日本語で（内容を）理解してそれではじめましょう、みたいな、それをすごく気にしてたんですけど、今はまあよくも悪くも気にしていなくて、逆にやっぱり最初に聞いちゃうと、それ分かった状態で読むと理解できちゃうかもしれないので、あまり聞かないようにして読むっていうのは、最近勝手にやってて、まあそれは悪いかもしれないんですけど。まあ勝手にやるようになってしまいました。でも昔のビデオでもやってたんですけど、読んで解釈者をやってあげて、学生が「あ、わかりにくかったですね」って自分で気づいてたんで。…（中略）…あまり聞く前に、先に読んでみますっていうことが多いのが、すごく違う、違いかなと。前のビデオは結構説明させてから、中身を見てるのが多かったの。実際そうしようみたいな形になってたので、チューターたちの中でも、そういうふうにする人が多かったの。…（中略）…あと、大体どういう研究をする子が多いのかっていうのが分かってきたので、余計（最初に内容を）聞かなくてもわかるようになったのかもしれない。

チューターとして経験を積み、チュートリアルにも慣れ、チュートリアルの技能や知識に関する引き出しが増えたことで、独自のスタイルの確立につながったものと推測できる。

4.2.5. チューター自身の「書き手」としての経験および成長

チューター自身の経験や、チューター自身が書き手として成長していくことがチューターとしての成長に大きく影響している語りも見られた。

個人的に思うのは、自分の経験がものすごく影響するなって。ライティング・センターで学んだことっていうのももちろんあるんですけど、それ以外の自分のリサーチャーとしての経験がすごく（指導に）影響する。だからやっぱり、ライティング・センター

の先生って自分が経験者っていうカリサーチャーである必要があるっていうか、必要があるとはそんなに強く言えないですけど、その方が絶対学生にとっていい答えができるんじゃないかって。

このように、チューターとしての成長は、ライティング・センターでのチュートリアルを通して学んだことだけでなく、チューター自身が論文執筆等を通して、「書き手」として成長していくことが大きく影響していることがうかがえる。また、これにともない、自身の経験に基づくアドバイスが増えた点も指摘している。

多分知らないうちになんですけど、自分がペーパーを書くことと読むことの自分自身の経験が増えてることと、修論があったことで、だいぶ変わってきて、相手にどんなことを言ってあげたらいいのかとか、ここはあんまり言わなくていいけど、ここはちょっとちゃんとやった方がいいだろうとか、そういうのが前は全然わからない、卒論しかやってなかった状態だったので、その辺があの一、相手のことを尊重しているようにみえるんですけど、自分がやった方がいいと思うことを、後のビデオでは押している感じがありますね。

学習者との立場を共有して、検索の仕方とかはよく教えるようになりましたね。自分が学期始まって、論文とか書かなくちゃいけなくなって、ゼミの友達とかに教えてもらった検索の方法とかを学生にシェアするようになりましたね。同じ「ペーパーを書かなくちゃいけない立場」として、そういうのをシェアするようになったかもしれない。

さらに、下記のコメントからは、チュートリアルの経験の積み重ねと自身の読み書きの学習体験の増加にともない、チュートリアルのスキルが向上した様子がうかがえる。

色々なジャーナルの体裁をみたりとか、文章を見たりとか、経験値があがったから、それによって学生とチュートリアルで話せる時間が多くなりましたね。

ライティング・センターのチューターは、学生が持参する文章に応じて様々なジャンルの学術誌を参照し、多様なジャンルの論文に触れる機会がある。また、自身の研究活動においても、様々な学術誌を読むため、双方の経験の相乗効果により、学術論文を読むスピードが向上し、その結果、より多くの時間を学生と一緒に文章を検討することに費やすことができるようになったという。

明子へのインタビューを通して、チューター自身の「書き手」としての経験と、ライティング・センターでのチュートリアルの実践経験の積み重ねが相互に作用しあい、指導の幅が広がり、より書き手に沿った、個々の書き手に応じた指導につながっていることが示唆された。

5. 考 察

調査の結果、2年間のチュートリアルを通して、2人のチューターには、それぞれ多様な学びと成長があったことが明らかとなった。一口に「成長」と言っても、チューターによってチューターの成長の捉え方はさまざまで、多くの要素によって構成されていることがわかった。チューターの成長に対する意識について個人差が見られたものの、2人のチューター間に多くの共通点も見受けられた。1点目は、当初は、ライティング・センターの理念を実践することを強く意識していたが、チュートリアルの経験を積む中で理念が身についたことで、意識をより「書き手」や「コミュニケーション」に向けるようになったことである。「書き手」により意識が向くようになり、書き手をよく観察し、書き手に応じたチュートリアルを提供することを意識するようになっていった。これは、佐渡島・太田（2014）の調査結果にも見られたことである。

2点目は、「学生の文章の内容を完璧に理解していなければならない」「学生の要望にすべて応えなくてはならない」「自分はチューターとして完璧でなければならない」といった、完璧さを追求する姿勢が和らいできた点である。チューターとして経験を積むにつれ、学生が持ってきた文章の内容について、分からないことは学生に質問すればいい、読み手の立場として向き合う姿勢へと変化していた。「ここはわからない」と学生に伝えることが、学生に気づきを与え、ではどうすれば読者に伝わる文章になるのか、学生自身に考えさせるきっかけになる。対話を通して学生と一緒に考えることで、学生自身の考えも整理され、明確になる。また、「チューターとして1つのセッションでできることは何か」を考えるようになり、学生の要望に応えるという意識から、学生と一緒に問題を解決するという意識へと変化していった。

3点目は、ライティングのプロセスにおける学生の精神面のサポートを意識するようになった点である。A大学のほとんどの1年生にとって、この英語ライティングの授業は負荷の高い授業であるため、ライティング・センターのチュートリアルにおいて、学生の授業や論文執筆に対する不安やストレスを軽減させ、自信を失いかけた学生をはげまし、論文を書き上げるところまで学生のモチベーションを維持させることも、チューターの重要な役割の1つである。直樹は自分らしさを出すことで、明子は学生をよく観察し、学生に応じたチュートリアルを提供することで、学生の精神面でのサポートを意識していることが分かった。

6. おわりに

本稿では、新人チューターのチュートリアルに対する意識の変化を、チューター自身の省察によって明らかにすることを試みた。日本のライティング・センター研究において、チューターの意識に着目した研究はこれまでほとんどなされていない。本研究は、チューターの意識の変化を縦断的に調査している点において意義深く、本研究で得られた知見は、今後の日本のライティング・センターにおけるチューター研修のあり方を検討する上で、有用な基礎

資料となりうる。今後は、インタビュー調査を通して明らかとなった、チューターのチュートリアルに対する意識の変容を時系列でより詳細に分析するとともに（具体的にどの時点でどのように意識が変化しているかなど）、録音・録画した実際のチュートリアルの分析を進め、チューターの省察によって示された実践と意識の変化が、実際のセッションにどのように現れているかについて、研究を進める。また、より多くのチューターの事例を分析することで、「成長」に関する意識のバリエーションやチューター間の成長過程の違いを明らかにし、さまざまな観点からより包括的にチューターの成長を捉えることが必要であろう。

註

- 1) 2015年より、このライティング・センターでは、1年生全員が履修する必修のスピーキング科目の受講者へのサポートも行っている。
- 2) A大学のライティング・センターにおけるチューターの採用ならびに育成についての情報は、調査当時のものである。
- 3) 明子については、2013年度の夏学期は、チューターの職を休していた。
- 4) 直樹も明子も同じ指導教官で、この指導教官がライティング・センターの責任者であったことが、チューターへの応募のきっかけの1つであったと語っていた。

参考文献

- Carter-Tod, S. (1995). *The role of the writing center in the writing practices of L2 students*. Unpublished doctoral dissertation, Virginia Polytechnic Institute and State University.
- Fujioka, M. (2011). U.S. Writing Center Theory and Practice: Implications for Writing Centers in Japanese Universities. *Kinki University Center for Liberal Arts and Foreign Language Education Journal*, 2(1), 205–224.
- Itatsu, Y. (2016). The EFL Writing Center in East Asia: Addressing Regional Challenges in the 21st century. In K. Oi (Ed.), *EFL writing in East Asia: practice, perception and perspectives* (pp.228–239). Tokyo: Seisen University.
- Nakatake, M. (2012). The impact of tutorial sessions at a writing center on student revisions. In the Professor Rossiter Festschrift Editorial Committee (Eds.). *West to east, east to west: Studies in the field of English education –Dedicated to Professor Paul Rossiter on his retirement* (pp.113–134). Tokyo: Seibido.
- Nakatake, M. (2014a). Tutor Feedback and Student Revision in an EFL Writing Center. *JACET-KANTO Journal*, 1, 36–50.
- Nakatake, M. (2014b). Tutoring Strategies in a Writing Center: An Exploratory Case Study. In T. Gally, Y. Sato, M. Nakatake, Y. Satake., & A. Mills (Eds.), *Changing roles of foreign language teaching/learning in the context of globalization in Japan* (pp. 17–34). Tokyo: MAYA Consortium.
- Nakatake, M. (2015). Students' Responses in the Revision Process to Writing Center Tutorials. *JACET-KANTO Journal*, 2, 55–69.

North, S. M. (1984). The idea of a writing center. *College English*, 46(5), 433–446.

太田裕子・佐渡島紗織 (2012) 「「自立した書き手」を育成するライティング・センターチューター研修とチューターの意識—早稲田大学における実践事例と PAC 分析—」『Waseda Global Forum』9, 237–277.

太田裕子・ Doyle 綾子・阪本麻裕子・佐渡島紗織 (2013) 「ライティング・センターにおける新人チューターの課題—新人研修ワークシートの内容分析」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』5, 1–10.

佐渡島紗織 (2009) 「自立した書き手を育てる」『国語科教育』66, 11–18.

佐渡島紗織・太田裕子 (2014) 「文章チュータリングに携わる大学院生チューターの学びと成長—早稲田大学ライティング・センターでの事例—」『国語科教育』75, 64–71.

佐渡島紗織・志村美加・太田裕子 (2009) 「日本語母語話者が日本語で英語文章を検討するセッションの有効性」『Waseda Global Forum』5, 57–71.

成田真澄・松林世志子・ヘイズ, ジョージ・前田ジョイス・金澤洋子・花岡修 (2012) 「学生ライティングチューターによる支援効果」『東京国際大学論叢言語コミュニケーション学部編』8, 75–86.

謝辞

長期間にわたる本研究への協力を快諾してくださった、A 大学ライティング・センターのチューターである直樹（仮名）と明子（仮名）に心から御礼申し上げます。

* 本稿は、筆者が The 6th Symposium on Writing Centers in Asia (2014 年) にて口頭発表した「チューターの意識はどのように変化していくのか—チューターの成長に関する一考察—」に修正・加筆を施したものである。